



INTERVIEW

脳卒中リハビリ

多くの人を悩ませる、まひの後遺症。患者の意欲を向上させる手法がある。

全国で約150万人と推定される脳卒中患者。まひの後遺症に悩む人も多いが、脳に刺激を与えて回復の可能性を調べたり、リハビリ効果や患者の意欲を向上させる手法が広まってきている。

脳梗塞で右半身がまひした大阪府泉佐野市の男性(62)は今年8月、「経頭蓋磁気刺激装置」を使った検査を受けた。昨年5月に倒れてから利き手の右手を全く動かさず絶望的になっていたが、磁気で脳を刺激し神経の情報伝達機能を調べる手法があると知って、装置を持つ同府熊取町のいとうまもる診療所を訪ねた。「せめて病状や回復の

可能性を知りたい」と、わらにもすがる思いだった。男性は手に電極を付けた8の字形のコイルを頭にかざした。装置が作動しコイルに電流が流れると、強い磁場ができて静電気のようなショックが脳から体へ伝わった。左手はびくっと動く。右手は全く反応しな

ことを示す波形が表れた。診察した伊藤守医師(脳神経外科)は「右手の先まで神経がつながっていません。これまで歩行訓練ばかり受けていたようですが、右手もリハビリすれば少しずつ動くかもしれません」と伝えた。

男性はその後、まひした右側の訓練を増やし、右手も使って靴ひもが結べるまでになった。「疲れるリハビリでもやる気が出ます。良くなる可能性があると感じなければ、何もかも投げやりになっていたかもしれない」と喜ぶ。

森之宮病院(大阪市城東区)の宮井一郎院長代理(神経内科)は「患者を励ましたり、回復度合いを教えることもリハビリ効果を上げる」と話す。同病院を含む8カ国計18

ループの歩行速度は平均毎秒0.72メートルまでしか伸びなかった。宮井医師によると、激励やタイム表示などの「報酬」があると、運動をつかさどる脳の部位「大脳基底核」で神経伝達物質ドーパミンが分泌されて活発になり、動作が身につくやすくなるという。

神経機能検査でやる気 ■ 激励が脳刺激、動作身につく

い。しかし、電極をつなげたモニターには、左手で試した時よりは遅いものの、右手にも刺激が伝わっている

も使って靴ひもが結べるまでになった。「疲れるリハビリでもやる気が出ます。良くなる可能性があると感じなければ、何もかも投げやりになっていたかもしれない」と喜ぶ。

検査は保険診療の対象。伊藤医師は「画像診断では分からない神経の機能を見て、適切なリハビリ計画を立てられた。モニターで波形を見たのも意欲向上につながったようだ」と評価する。まだ研究段階だが、脳に繰り返し磁気刺激を与えるとまひを緩和したり痛みを軽減する効果が期待でき

施設による共同実験で、脳卒中のため半身不随になった入院患者計179人に毎日10分歩いてもらった。半数にはかかった時間を計って教え、「もう少ししたてばもっと速く歩ける」などと激励。残り半数は計測せず、退院時に両グループの歩行速度を比べた。

研究開始時は両グループとも平均毎秒約0.45メートル遅かったが、タイムを教わったグループの平均速度は退院時には倍の毎秒0.91メートルと、ゆっくりながら屋外で自由に歩けるレベルになった。一方、計測しないグ

具体的はどう動くか想像したり他人の動作を見ることも脳を刺激し、リハビリ効果を向上させる。宮井医師は「手足が不自由になるのは体の部位に命令を伝える神経が傷つくせいだが、動作について考える時に働く別の神経も動作の遂行に密接にかかわっているようだ」と説明する。

宮井医師らは、近赤外線を使った観測装置で、ある動作が身につく前後で活発になる脳の部位が変わることも解明。「変化を見ながら訓練してもらうことも脳を刺激する可能性がある」と期待している。

【林田七恵、写真も】



経頭蓋磁気刺激装置で神経の機能を調べてもらう男性—大阪府熊取町のいとうまもる診療所で